

< 県研究主題 >

児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 石山 博司 (中地区)

< 研究主題 >

児童一人ひとりの願いや思いをはぐくむ総合的な学習の時間

1 提案内容

単元の立ち上げで“身に付けてもらいたい力”として「追求していく力」「人とかかわっていく力」「伝える力」を示し、活動の内容やテーマを精選し、活動のテーマが「きずなを深める」「地域・みんなのため」となったため「釜石市の奇跡」の映像から、防災の学習へと進めた。

(1) 学習のあゆみ

- ① オリエンテーションとして、イメージマップで活動のテーマを決め、ブレインストーミング的手法で意見を拡散し、練り上げる。
- ② 「釜石の奇跡」をもとに“防災”に関心をもたせ、マップ作りに取り組み、マップ発表会をする。見せ方・表示の工夫を見合い、自己評価・他者評価をする。
- ③ 地区防災マップ作りで、台風での被害状況や近所の様子から防災についての意識をもち調査を行い、自治会長に防災倉庫の見学をさせてもらう。
- ④ 防災マップ発表会として、保護者、自治会長、消防団を招いての発表会をする。
- ⑤ 防災マップパワーアップ大作戦として、発表会で他のグループ等からのアドバイスをもとに、特徴を捉え直し、見やすく、わかりやすくなるための工夫をする。
- ⑥ 防災マップをもっとたくさんの人に見てもらおう方法を考え、地域の人に防災マップをお届けしよう。
- ⑦ “防災の大切さ”を伝え、「だれに・何を・どうやって」伝えたらよいかを考え、相手に必要なことをわかりやすく伝える手段や方法を考える。幼稚園・保育園を訪問し、防災についてどのようにしたら上手く伝わるか考え、他者意識の確立を図る。

< 成果 >

- 防災学習を通して、「自分たちの命とかかわる」ということ、「地域の人々を救いたい」という思いが切実感や使命感となって活動の意欲につながった。
- 防災の工夫について自治会長や地域の人に聞き取り調査をし、アドバイスや自分たちの活動の振り返り等、より高めていくための視点を得ることができた。
- 多くの人とのいろいろな関わり合いを設定し、他者意識の土台である「相手の立場で考える」という姿が見られるようになった。

< 課題 >

- グループでの活動が多く、個々の疑問や課題を全体で共有する場や時間を設けられなかった。
- 個々のまとめや発表を他者からの評価だけでなく、観点を提示し自己評価させ、課題の具体性を高めて、改善する活動が必要であった。
- 地域との継続した取り組みの設定の仕方や、新たな受け入れ先の開拓の必要性があった。
- 防災について、自分たちなりの理解や一定の理解の枠組みを用意する必要があった。

2 協議内容

◇どのような思いの中で「防災マップ」を作成することになったのか。

→マップを作成することにより「人・もの・こと」と関わることができるのではないかと。また、マップを作成することで、児童の思いが校内だけに止まらず意欲が高まると考えたため。

◇児童からの「人々の命を助けたい」という思いは、どの時点で出てきたのか。

→「釜石の奇跡」をみたことで、事象が身近なものに感じられ、「マネをしたい！」という思いが子どもたちから生まれた。

◇校外学習に出る際の安全面の工夫について。

→6グループで3回、校外学習を行った。その際、各班1人保護者のボランティアがついた。保護者に協力を要請したことで、学校・地域・家庭が一体となって学習が進められた。

◇他クラスでの取り組みは同じなのか。

→他の2クラスでは、3つの力を基にしなが、違う課題に取り組んだ。

◇防災について伝えるための相手が園児であった理由について。

→だれに・何を・どうやって伝えるかを考えた際、下の子に教えたいという思いや意識が強かった。

3 まとめ

子どもが主体となって活動を設定し、学習を進めることは大切だが、子どもの実態に応じて教員がある程度“意図的な取組”をしかけ、ねらいを明確化していくことが必要である。

そのなかでは、各教科との関連を意識し子どもの基礎学力を見据え、取り組みを設定することが求められる。マンネリ化しないよう、学習題材との出会い方、子どもにとって身近で興味を持ちやすい題材を提示等の工夫も大切である。

さらに学習を進めるにはウェビングや付箋を活用し、子どもの考えを可視化し、個の考えを大切に扱うことで、知り得た情報をアウトプット、インプットすることを心がける必要がある。そうすることで、子どもの思考のプロセスが明らかになり、学習に深まりが生まれる。

[全体協議]

- ・カリキュラムについて、固定化したものを実施するだけでなく、状況に応じて変えていきたい。
- ・共通したつきたい資質能力を教員自身もっておくことが必要である。
- ・学級目標とリンクさせて取り組むことが大切である。
- ・行事との兼ね合いで自由度が低く、学校や学年、個人によって温度差がある。
- ・地域の材を大事にし、歩いて行くことができることが大切である。
- ・計画の見通しで、教員のねらいと子どもの思いがずれた場合、立て直しをする必要がある。
- ・評価の難しさがあり、一人ひとりを丁寧に見取る必要がある。
- ・主体的に学習を進めるため、子どもたちが受け身でなく、自分から本気になって取り組めることが大切。それを繰り返すことで徐々に主体的にとりくもうとする姿勢が育っていく。
- ・学級作りのなかで、子どもの思いを引き出し、見通しをもって取り組めるようにする。
- ・材の決定に時間をかけ、壁を設けることが子どもたちの気持ちを継続するために必要である。
- ・出てきたギャップをモチベーションにすることが大切である。
- ・カリキュラムの大枠が決まっていると安心し、学習の積み重ねが大切である。職員間で、年度ごとに振り返り、他学年のカリキュラムを共通理解することが大切である。

<研究主題>

観察と制作物による評価のあり方

1 提案内容

(1) 観察による評価

- ① 評価の方法『観察』とは形成的評価を行う上でとても重要で、子どもの実現状況を瞬時に観察しながら、評価し、次の展開や支援・手立てを考える。
- ② 『観察』の場面で活動を通して、「どのような力を育てるのか」という指導目標がないと、活動だけで編成した指導となり、子どもが力をつけることができない。子どもがもつめあてと指導目標の違いを意識し、一致した状態で評価に臨む。
- ③ 事例では、指導目標を意識した観察で、一枚の写真から振り返りの質が変わり、「もう一度交流したい」と次への意欲につながり、次の交流で交流計画に「どのようなかかわり方をすれば、園児が喜ぶか、安心するか」と話し合いが加わり、振り返りの質が変わったことで、「かかわり方」という点で大きな変化を見ることができた。

(2) 制作物による評価

- ① 評価の方法『制作物』とは、子どもの学びの過程が表れ、総括的評価である。制作過程を観察などの形成的評価と組み合わせることが必要である。
- ② 『制作物』の評価において大切なことは制作物だけ进行评估するのではなく、考えや過程も大切にす。目標設定により、制作物と規準を照らし合わせ、多様な表現方法の見取りで、作成の意図やこだわりなど細部まで評価する。異なる評価方法との組み合わせで、形成的評価と組み合わせにより、客観的な評価になる。
- ③ 事例では、一見すると自分の考えなどもなく、生き物の絵を描いたものに見えるポスターでも、子どものこだわりが隠れている。そのこだわりを見取ることが適切な評価につながり、価値ある学びの姿と言える。単元評価規準の「学ぶ力」と「かかわる力」を十分に満たす姿であると見取ることができた。

2 協議内容

- 写真を振り返りに使ったが、対象の子どもへのその場での声かけは行ったのか、また、その子どもの振り返りはどうだったのか。
⇒声はかけていない。振り返りでは「無意識でやっていた。腰に手を添えることが良かったなんて。」と言って、振り返りの場面で、意識化されたのだと思う。
- 1回目の交流で、子どもが園児の腰に手を添えた写真が撮れると予想したのか。
⇒1回目は「ふれあい」が見ればよかった。「仲良くなったら」腰に手を添えることもできるであろう。仲良くなるために、行動してほしいとの思いがあった。
- 授業の中で、教員と子どものめあての違いの修正はできなかったのか。
⇒1回目では子どものめあてをそのままに、振り返りの場面で気づきを促す指導。
- 2回目に向けての手立ては。
⇒子どもが「やる」と自然に進み、自分で園長先生にお願いにいく姿勢も見られた。
- 他の制作物にはどのようなものがあったのか。
⇒場所にこだわって描く、絵もプロに相談など、こだわりを見せた。場所を真剣に考える姿が良くプレゼンを行い、しっかりと自分たちで許可を得られた。

- ポスターは相手意識をもって書き、こだわりをもつ中にも見やすさは追求していかない。子ども同士で見合うことで改善できると思うが、相互評価は行わないのか。
⇒今回は教員の評価のみで行った。子どもたち同士の評価もありうると思う。評価した子どもへの評価、というのも大切だと思っている。
- 子どもの実態・発達段階に応じた評価と思うが、学校全体での取組で苦しかったところや気をつけたところはあるか。
⇒目標設定が難しく、学年間の連携の点で課題が残る。「足あとを残す」「子どもの姿で繋ぐ」ことを意識し、教員自身が意識するために全クラス発表なども大切。

3 まとめ

総合的な学習の時間では、「計画・目標・想定」が教員に求められ、しっかりと取り組むことで、学力にも結びつく。子どもが園児の腰に手を添えた写真があり、その場に入った人間には、あの手には気付けない。だから日常的な子どもの理解、そして日々の積み重ねが大事だ。観点をしっかりと見つこと細かく評価でき、その観点が子どもの実態とずれてはいけない。指導の方向性や学校の学習計画などと照合し吟味することが必要だ。最終的に子どもの変容・育ちが分かれば良い。どういう力を子どもにつけさせたいのか、そのためにどんなことをしていけば良いのか、考えることが大切である。

グループ協議

● 協議の内容の概要は次のとおり

- ・カリキュラムについては、毎年決まっているが、一方で変革を求めている気もする。
- ・材について、主体性をどのようにもたせていくかが鍵。育てたい資質をしっかりとつことが大切だと思った。ならば、学級目標そのものである気がする。
- ・総合的な学習の時間の扱いについて、個人によって温度差がある。教員全員でウェビングマップに取り組み、カリキュラム作成で、少しでも意識を変えようとしている。
- ・材との出会いについて、何度も足を運べるから地域が大切。ズレが生じたら、計画を見直すことも大切。
- ・計画と評価では、子どもに対してとにかく褒めることが大切。それが主体的に取り組むためのいちばんの手立てだと思う。
- ・材について、地域のものでできる限り活用し、ある程度柔軟に対応していくべき。子どもに何を身につけさせたいかが大事。
- ・主体的に取り組むために、自由に課題を設定するべきで、本気で取り組むことが大切。
- ・材について、総合を研究するための時間を学校で確保していく必要がある。またフレキシブルに選べるような体制づくりが大事。
- ・主体性について、学習があらかじめ設定されているから見えないのではないだろうか。メリットは大枠があるから、安心感をもつことができ、デメリットはやめるということが難しい。(去年はやったのに、今年はやらない流れ)
- ・カリキュラムについては、積み重ねがうまくいってなく、設定されていないため、子ども一人ひとりの思いがずれてしまう。そうならないため、①年度末の学年の振り返りに、他学年の先生も参加する。②4月に新学級で子どもと一緒に、昨年度の学びを振り返る。掘り起こすことによって、地域素材も出てくる。